

# A c a n t h u s

第20号『ブラリひょうたん』高田保 後篇

平成22年1月26日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会  
日本館活用委員会

保は大学進学当初、中学・大学とも先輩で従兄の山口剛(中1回)のもとから通った。山口は当時早大高等師範部講師で、のち早大教授。江戸文学研究の基礎を築いたとされ、中国文学書の翻訳での評価も高い。のちに『ブラリひょうたん』にちりばめられる保の和漢の知識の源は、従兄の家での日々にもあったのかもしれない。大正6年卒業。その秋最初の咯血。子規らを苦しめた肺結核が保にもとりついたのであった。

←「ブラリひょうたん」執筆ときに描いた自画像



## 高田保はパリ通

映画雑誌会社勤めを経て、生活の場は浅草に。大正7年以降11年に至る間、僕は全く飄々として風来の徒となった。就中9年前後の二年間は、僕は浅草公園に暮らした。人生落伍浮浪の徒は親しき友となった。この間衣食した所は金龍館即ち浅草歌劇の世界である。」とは、『人魂黄表紙』自序にある保の回想である。

大正11年公園劇場などを経営する根岸興行の文芸部に在籍、脚色家・演出家としての才能を開花させる。この前後、興行社の娘むめ(梅)と同棲。大正12年の関東大震災は劇場街をも焼け野原にするが、その二画のむめが所有していた焼跡地に買い手がつき、むめに思わぬ大金が入る話が舞い込む。本場パリでの演劇修業は保の年来の夢であった。パリが舞台のフランスの戯曲や小説を片端から読みあさり、パリの広場や橋の名、静かなモンパルナスやカルチエラタンのカフェ、庶民的なモンマルトルの居酒屋の名も知っていた。そしてどこそこの街角には噴水があり、その横にポストがあることまで覚えてしまった。大宅壮一が保と一緒にパリが舞台のフランス映画を見たとき画面を見ながら保がこれは何通りで角から何軒目にどんな店があるかということまで説明するので、パリに行っていた人よりよっぽど詳しいと大宅は呆れたという。

保のパリ留学は、彼を一人前の劇作家に育てたいむめの願いでもあった。渡仏などは夢のまた夢という時代、近づく正夢に保が浮かれるのも無理はない。会う友ごとに渡仏の話をつづたうわさは土浦にも聞こえ、中学同窓中心に保を招いて盛大な壮行会が催され、饒別も集まった。しかし事態はここから暗転する。むめの実家が温泉のボーリングに手を出して失敗、多額の負債を抱え込み、むめに回すはずの入金はその穴埋めに消えた。保がこの時ほど落ち込んだことはなかったろう。饒別までくれた旧友にも会わせる顔がない。この件以降保の土浦に向く足

## は遠のく。

## 旧島崎藤村邸での晩年

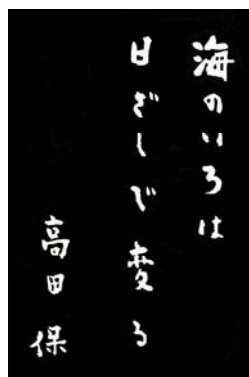
戦前戦中にも保の話題は少なくないが、紙幅の都合で話を先に進める。

昭和18年、病勢の進行から転地療養の意味もあって知人のついで大磯に移住、その後二度目の転居で旧藤村邸に入る。大磯でも保の人のなつこい性格からその住まいは夜な夜な様々な町民のサロンと化した。作家保に寄るのではなく人間保に集まったのである。23年12月、保の文名を決定づけることになるコラムの新聞連載が始まる。保は戦前、左翼シンパとして拘留された経歴を持つが、コラムの表題『ブラリひょうたん』を自ら説明して、「元来私は右でも左でもない。ブラリとはつまり宙に浮いていることである。ひょうたんはブラリから来たツケタシの言葉で別に意味はない」としている。その鋭い社会批評は、洋の東西・時代の古今にわたる博識が紡ぎだす挿話の興も加わり評判を呼んだ。

一例を挙げると、「非武装自衛」といった固い話でも、その折の季節にちなんだ内裏様の向き様から入り左甚五郎の話へ、そして梅原龍三郎からインドのネール首相に転じ、旅の伶人が海賊に襲われる古今著聞集の話へと続き、読む者を引きつけ飽きさせない。広津和郎の「旅の帰途偶然手にした新聞で初めて高田保のコラムを読んで驚いた。面白い、いや単に面白いでは足りない。才気も深みもある。帰宅するとすぐ家人に明日からこの新聞を配達させるよう指示した。」という話が世評を物語っている。

結核の特効薬ストレプトマイシンも保にとっては時すでに遅く、一時的な小康をもたらしたに過ぎなかった。『ブラリひょうたん』五百二十八章を遺し、昭和27年2月20日永眠。享年五十七歳。大磯での葬儀には文学界・新聞関係に加え、当代第一線の舞台俳優が居並んだ。遺骨は土浦の高田家菩提寺に葬られたが、大磯町は高田家に分骨を乞い、保が愛した大磯の海が

保の描いた大磯の風景画  
と小公園の記念碑碑文



見渡せる丘に葬り、町民も集つ小公園とした。記念碑には保の好きなことば、海のいろは日ごとく変る」が刻された。町生まれでもない作家が町からこのように遇される例も稀である。死後出版された『ブラリひょうたん』はベストセラーとなった。昭和31年には、保の生家に近い亀城公園にも文学碑が設けられた。碑面には、羊軒の号で俳句もよくした保の「あの花もこの花もみなはるのかぜ」が『ブラリ』連載のおぜん立てをした阿部真之助の揮毫により刻されている。

代表作『ブラリひょうたん』をはじめ保に関する資料は旧本館に数多く展示してあります。ご来館ください。